

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	大門町大島町中学校組合立大門中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	6	5	7	0	18	35
生徒数	218	171	248	0	637	

研究の概要

1. 研究主題

一人一人が「確かな学力」をつける学習指導はどう工夫すればよいか。

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

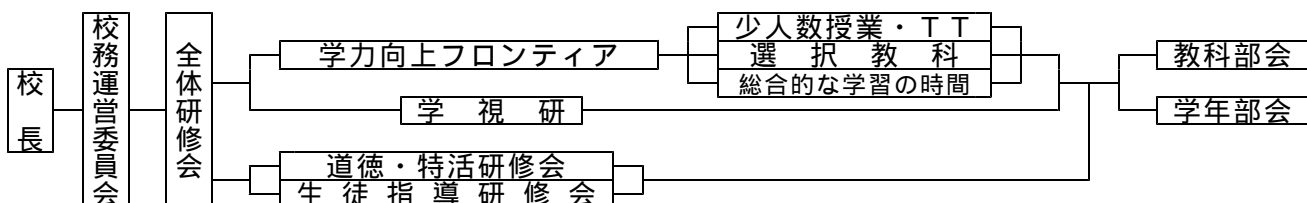
少人数授業
 ・1年—数学、英語 ・2年—国語 ・3年—数学
 生徒の理解の程度に差が出やすい教科、学年であるため。
 選択教科
 ・全学年において、国語、数学、英語の習熟度別コースを設定する。
 生徒の理解の程度に差が出やすい教科であり、生徒に対する実態調査の結果から、実施学年・教科の枠を広げ、研究に取り組むため。
 総合的な学習の時間
 ・全学年において、課題追究学習を設定し、自ら学ぶ力を育成する。

(2) 年次ごとの計画

平 生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導の充実を図り、「確かな学力」の向上を目指す。
 成 研究の見直し
 「確かな学力」を、知識や技能だけではなく、自ら学ぶ意欲や態度、思考力、判断力、行動力、表現力などの資質や能力をも含めてとらえ、必修教科（少人数授業）・選択教科・総合的な学習の時間の連携を図りながら、学習指導を展開する。その中で、個に応じた教材の開発を行ったり、学習意欲を高める評価の在り方を工夫したりするなど指導方法・指導体制を見直し研究を進めることとした。さらに、自分の考えをもつ場、学び合う場、考えをまとめる場、発表する場を設定したりするなど、生徒が主体的に学ぶ学習活動を工夫することにより、「生きる力」を育成するための「確かな学力」を定着させることができる。
 15 研究の内容・方法
 個に応じた指導のための教材開発
 ・実態把握と問題点の分析
 ・習熟度別教材の開発
 ・生徒の意欲や思考に応じた補助教材の開発
 ・興味・関心を高める教材の開発
 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫
 ・「確かな学力」の明確化
 ・必修教科と選択教科、総合的な学習の時間との連携
 研修体制の確立
 ・研修組織の整備 ・研究授業や互見授業の実践 ・研究成果の公開
 年 度

平 生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導の充実を図り、「確かな学力」の向上を目指す。
 成 研究の見直し
 必修教科（少人数授業）・選択教科・総合的な学習の時間の連携を深め、系統的な指導を確立し、個に応じた指導方法・指導体制の充実と学力の評価を生かした指導の改善を図ることにより、「生きる力」を育成するための「確かな学力」を定着させることができる。
 16 研究の内容・方法
 個に応じた指導のための教材開発
 個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫
 指導に生きる評価の工夫
 ・学力調査の分析・評価（自己診断）テストの作成・学習意欲の向上を図る評価の工夫
 年 度

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

(1) 少人数授業

習熟度別少人数学習集団の編成上の工夫

興味・関心別少人数学習集団	学習課題別少人数学習集団
学習方法別少人数学習集団	学習進度別少人数学習集団

- 生徒の実態や学習内容に応じて4つのタイプを組み合わせて、より効果的な習熟度別少人数学習集団を編成した。
- 生活集団を基本とした従来の学習集団編成ではなく、習熟度・学習課題を考慮した学習集団編成をタイプを整理して行うことで、学習効果を上げることができた。
- 単元によりTTとの組み合わせを工夫することで、より効果のある授業が展開できる。
- 少人数指導の授業での補充的・発展的な指導方法の工夫
- 単元ごとに自己評価表を各教科で作成、活用し、各単元で自己評価したことや定着度別テストの結果から次回への見通しを教師、生徒ともにもつことができた。習熟度別に指導すべき学習内容を明確にし、基礎・発展のどちらのコースでもその単元の学習内容について、おおむね満足する段階まで生徒一人一人の定着度を引き上げるための指導の工夫を図った。
- 個に応じた指導の充実を図るための教材開発と学習形態の工夫
- 習熟度に応じた多段階の学習プリントや学習の遅れを補う補助的な資料の作成と累積(自由に選べるコースごとの学習プリント、理解を助ける補助教材)を行った。

- ・確認テスト、復習プリント〔国語、数学、英語〕
- ・習熟度別のワークシート(基礎・発展のコース別)〔数学〕
- ・生徒の実態に合わせたワークシートの工夫(話す、書く内容や分量)〔英語〕
- ・コンピュータを利用した活動形態の工夫〔国語〕
- ・コース別の活動(パネルディスカッションとスピーチ)(レポートと広告作成)〔国語〕
- ・コミュニケーション活動での到達目標の明確化。(オリエンテーションカード)〔英語〕
- ・スピーチ、スキット練習などでの個別指導〔英語〕
- ・生徒全員の発表をビデオで撮り、自己評価・相互評価に活用〔英語〕

(2) 選択教科

自分の特性等に応じた教科を選択し、自らの個性を伸ばす生徒の育成をめざし、次のような重点目標を定め、コース設定を行った。

- ・国語、数学、英語の教科では習熟度に応じて、基礎・基本の定着を図るとともに、補充学習や発展的な内容を学習するコースを設定し、個に応じた学習の充実を図る。
- ・音楽、美術、保健、技術、家庭の教科では必修教科の内容をさらに発展させ、専門性を高めるとともに、個性の伸長を図る。
- ・個に応じた教科やコースを選択できるように事前に学習内容をより詳しく示すとともに、学年や学級でのガイダンスの充実を図る。

今年度の開設選択教科

第1学年(週1時間 30時間)

教科	時間・方法等	前期	後期
国語、数学、英語	週1時間 前・後期制	各教科基礎・補充・発展の3コース	

第2学年(週2時間、2時間続き 70時間)

教科	時間・方法等	前期	後期
Aタイプ 国語、数学、英語	2時間 1時間単位で、2教科を選択 前・後期制	補充・発展 基礎・基本 の4コース	国・数 数・英 英・国 数・英
Bタイプ 音、美、技、家	2時間 2時間単位で、1教科を選択 前・後期制	補充・発展	各1コース

第3学年(週3時間 105時間)

教科	時間・方法等	前期	後期
国語、数学、英語	週1時間 通年 1～3組、4～7組の2つに分け	基礎・基本 各2コース	
Aタイプ 国、社、数、英	2時間 1時間単位で、2教科を選択 前・後期制	補充・発展	各1コース
Bタイプ 音、美、体、体、家	2時間 2時間単位で、1教科を選択 前・後期制	(英語のみ2コース)	

2, 3学年は前期でA(B)タイプを選択した生徒は、後期でB(A)タイプを選択する。

個に応じた指導方法・指導内容の工夫

- ・国語科
 - ・書く活動では、小学校の学習内容の復習を含めた、漢字の級別プリントを実施した。
 - ・漢字以外にもワークシートや学習プリントを自由に選ぶ場を設けたことで自分の意欲や能力に応じて取り組むようになった。
 - ・読む活動では、音読練習を中心に行った。「ミニ読書」と称したプリントを毎時間配布し、一斉読みやグループでの音読、一人読みへとつなげていった。
- ・数学科
 - ・1年の基礎・基本コースでは小学校内容の計算から順に級を設定し、各自のペースで取り組ませた。また、TTを組み、一人は机間指導し、一人は採点しながら間違いに気付かせる指導をし、生徒一人一人に応じた指導を工夫した。

・補充や発展コースでは毎時間課題プリントを作成し、終了した生徒から発展的な補充問題に取り組ませた。さらに、パズル的な問題や、思考を要するクイズ形式の課題を用意し、生徒の興味・関心を高めながら、課題解決に取り組ませた。

・英語科

・基礎コースでは、授業の導入にチェックテストを行い、一人一人の実態を把握し、苦手な文法事項に焦点を絞った授業を展開した。また、グループワークやインタビューゲーム活動を多く取り入れ、英語を使うことで生徒の自信を深めることができた。

・ワークシートに自己評価アンケートの欄を設け、生徒の要望等を記入させ、次回の指導内容に反映させるよう心がけた。

・発展コースでは、毎時間「一言英会話」を実践したことにより、コミュニケーション能力が身に付き、学習を重ねることに生徒の英語での反応が速くなった。

(3) 総合的な学習の時間
育てたい力の明確化

ア	自分の興味・関心をもとに、自ら課題を発見する力
イ	主体的に課題を追究する力 (プランニングの力、情報活用の力、他と関わり合う力、自ら考える力)
ウ	自分の考えをまとめ、自分らしく表現する力
エ	自分の生き方を考える力

各学年で課題追究学習を設定し、4つの育てたい力の定着を図った。

ア	・「共に生きる」のテーマで取り組んできたため、環境や福祉また、国際理解に対しての関心が高まり、課題意識をもって生活し、今後も追究していこうとする生徒が増えてきた。 ・新聞やテレビのニュースに関心をもつ生徒が増えてきた。
イ	・小学校時の学習でも、ウェビングやマッピングなどを経験している生徒が多く、コンピュータ操作にも慣れており、これらの基礎的な技能は身に付けつつある。 ・様々な調査活動や発表、校外での体験学習を通して多くの情報に触れ、自ら必要な情報を入手することの大切さを実感していた。そして、多くの人と接し多様な情報を得ようとする生徒が増えてきた。
ウ	・プレゼンテーションソフトでの資料作成を経験すると他の活動でも抵抗なく取り組めた。 ・総合的にまとめる力はレポート作成だけではなかなか身に付かないが、分かりやすく発表したり、他の発表を聞いたりすることで少しずつ身に付いてきている。
エ	・地域の現状を理解し、そこに携わっている方の思いや考えを聞く場(地域人材の活用)を設定したことで、地域の中の自分という見方・考え方が身に付いてきている。

2. 今後の課題

(1) 少人数授業

単元や生徒の実態に応じて、TTと少人数授業、習熟度別学習集団を効果的に組み合わせ、個に応じたきめ細かな指導を工夫し、生徒がより主体的に学習に取り組む姿勢を育てる。

人数が少ないという学習における効果は確かにあり、学期ごとに実施した生徒のアンケート調査からも「少人数の方が分かりやすい」と答える生徒が95%と圧倒的に多い。今後はさらに、生徒の学習状況を客観的に把握する実践を通して、生徒が自分自身の「確かな学力」の定着を確実にとらえ、それが自信につながるよう指導法の工夫・改善を図らなければならない。

(2) 選択教科

コース設定及びガイダンスについて

・生徒や教師のアンケートをもとに、より個に応じたコース設定を考える。

・早めにコース設定をし、指導計画、指導内容を見直し、生徒がねらいや学習内容を把握できるよう来年度のガイダンスをさらに充実したものにす。

個に応じた指導内容や指導方法の工夫について

・習熟度や基礎、発展に分けて選択するものの、コース内における生徒の個人差は大きいので、指導内容や指導方法のより一層の工夫をしていかなければならない。

・必修教科との連携や学力の評価を生かした指導を研究し、「確かな学力」の育成を図るとともに、どのように検証するのかを考えていかなければならない。

(3) 総合的な学習の時間

十分に身に付いていない力を分析し、そのために身に付けさせたい基本的な事項について整理する必要がある。

各学年毎に育てたい生徒の姿を具体的に明らかにし、生徒の実態に応じた見通しをもった全体計画の見直しが必要である。

学力把握のための学校としての取組

・教研式標準学力検査	
調査の目的	生徒の学習状況の変容を捉えるため
実施内容	1・2年 国語、数学、英語
時期	平成16年3月

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・公開授業	
平成15年 9月25日	2年 国語 (TT)
平成15年11月25日	1年 数学 (少人数授業)
平成16年 2月19日	1年 英語 (少人数授業)
・ホームページで研究内容を公開	・「研究のまとめ」を作成

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- | | | | | |
|----------------------|--|--|--------------|-----------------|
| 【新規校・継続校】 | レ 1 5 年度からの新規校 | レ 1 4 年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | レ 3 学級以下
レ 7 ~ 9 学級
レ 1 3 ~ 1 5 学級 | レ 4 ~ 6 学級
レ 1 0 ~ 1 2 学級
レ 1 6 学級以上 | | |
| 【指導体制】 | レ 少人数指導
レ その他 | レ T . T による指導 | | |
| 【研究教科】 | レ 国語
レ 外国語
レ 保健体育 | レ 社会
レ 音楽
レ その他 | レ 数学
レ 美術 | レ 理科
レ 技術・家庭 |
| 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 | レ 有 | レ 無 | | |